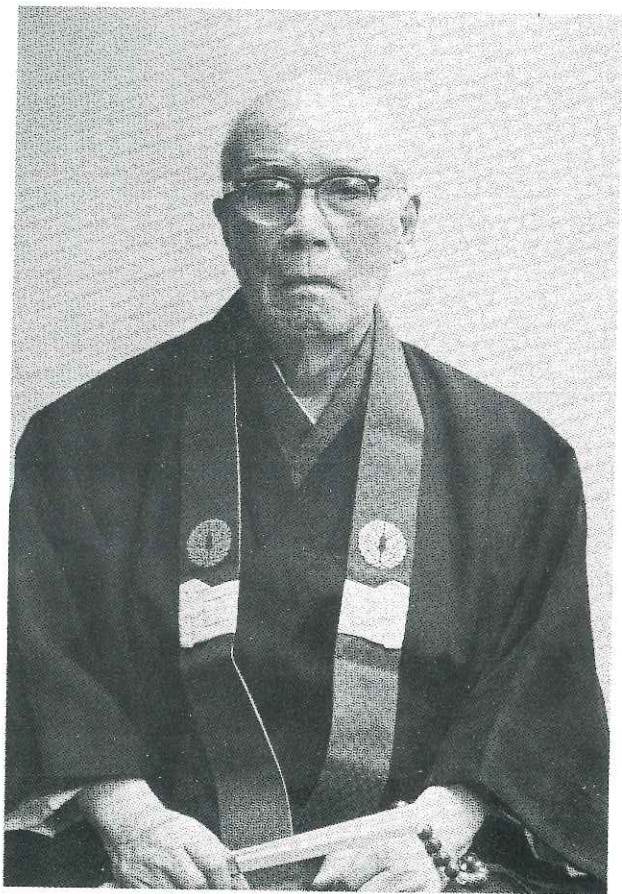


曾我量深先生
還曆記念講演

親鸞の仏教史観

曾我量深述



曾我量深先生

『親鸞の仏教史観』のあとさき

藤 このたび出版部が、曾我先生の『親鸞の仏教史観』を独立させて、出版したいという企画をたてまして、あの還暦記念講演会が開かれました当時のことを、松原先生にかえりみていただいて、前後のいきさつや、曾我先生を中心とした『興法学園』同人の方の想い出などを語っていただき、それによって、はじめて『親鸞の仏教史観』に触れられる人々の手引きともし、また、再読する人々のための解説ともしたい。こういう願いで、今日こうしてお伺いしている次第です。

そこで先ず、還暦記念講演会を開かれた興法学園同人の方々の願いといいますが、その辺りからお聞かせいただけませんかでしょうか。

松原 そうですね。あの会は、曾我先生の還暦に当たって、それまでに先生の教えを受けた者が、先生のこれから新しい、六十歳を区切りとして、また非常に健康でもおられたものですから、将来に対してわたし共にひとつ教えをいただくこうと、このような願いで、記念講演会を開いたわけです。

藤 そのことは、金子大榮先生のごあいさつにのっているわけでしょうか。

松原 ええ、そうした事情は、曾我先生のお話が始まる前の、金子先生のごあいさつの中でと、お話をお聞きしたあと、閉会の辞の中で、自分が受けた感銘を述べておられますので、ある意味で、十分解説になっています。そういうことで、彌生書房の曾我先生の選集などの中にもあれが置かれているんだと思います。

藤 あの文章は、出版部の意向としても、今後そのまま載せたいということです。

松原 それは入れた方がいいですね。

そこで、興法学園のことですが、同人として、序文にも名前が出ていますし、触れないわけにはいかんでしょうが、この話をする、大谷大学の騒動のことから始

まって、際限がないことになりましたが、一応、興法学園の成り立ちのことは、ちょっと触れさせてもらいます。それからあの会を開いたいきさつも、金子先生のあいさつに出ていますので、あとあの文章に触れて、読んでいてもいいですね。

それよりも、仏教史観というのをなぜおっしゃったのか、という問題があるんですね。とくに仏教史観を親鸞に求めたわけですからね、親鸞の仏教史観と。明治以来の日本の各大学における仏教研究の在り方、その方向が、明治以前とは大きく変わってきますね。というのは、大体明治以前には、日本の仏教徒は、中国もそうですが、漢訳経典をよりどころにしていますね。とくに日本仏教というのは、聖徳太子のはじめから、大乘日域相応といって、大乘仏教、大乘経典というものを掲げて立っています。そして、大乘の、『無量寿経』はもとよりそうですが、『華嚴経』であれ、『涅槃経』であれ、『法華経』であれ、お釈迦さまの金口のおことばだと、そう信じておったものです。それがいま問われてくるのです。

それですね、私も出版部から解説を求められましたので、筆を持ってみたんで

すが、指が痛みますんでね……。で、書き出しのところを少し書きかけてみましたんで、ちょっと読んでみます。

「今度東本願寺出版部が、曾我量深先生の十三回忌を記念して、先生の数多い著書の中から『親鸞の仏教史観』という一書を選び、刊行して、広く頒布されますことは、今日まことに當を得た企画であると、私も心より賛同いたしたいのであります。それと申しますのも、教団の機能というか、生命ともいわれるべきものは、正法の宣布でありますが、真宗教化の実践が、なにか今日、容易ならぬ壁につき当たり、混迷の中にみな戸惑いをしておるように思われます。そのとき、先生の六十歳の還暦を迎えられての大獅子吼の講演記録である本書を繕ひもとき、改めて、浄土真宗が世界の中の真宗であり、大乘仏教の至極である『大無量寿経』の教説こそ、人類救済の根本聖典であることを、仏道実践の歴史の歩みをもって、先生が証明なされたことに、深い感動を覚えるのであります。

今、本書の出版に当たり、解説を求められたことではありますが、私は、何よりも本書を熟読し、本書の叫びに耳を傾け、全身を耳にして聴聞していただきたいと願うものであります。解説としては、ただ本書を繕く方々への手引きとして、本書の生まれてきた由来と、また、本書の仏教史観という題目に触れて、少しく説明を加えたいと思います。」

と、こういうふうを書いてみたんですけれどね。そこで本書の内容ですが、これは昭和十年五月十日から十二日に至る三日間にわたって、京都の山口会館において行われた、曾我先生の還暦記念講演の記録です。その講演の前に、先生の還暦記念会の発起人を代表されまして、金子大榮先生のごあいさつがありました。その中で、曾我先生その人について、金子先生は、このように紹介しておりますね。

「若し先生がお出でにならなかつたならば、われわれは本当に仏教というものを理解することができたかどうか、本当に浄土真宗というものを自分の身に著け

ることができたかどうかということをもってみますというと、もし今日生まれ合
 わせなかったならば、おそらく私どもはこの長い間の仏教の本当の伝統の精神を
 ただ因襲のままに受け取っているか、あるいはどうしても受け取ることができな
 くてまよっているか、どちらかに終わったであろうと思うのであります。それが
 仏祖の精神というものを本当にその一分でも受け取ることができるようになっ
 たということは、これは何と申しましても（曾我）先生が出られました同じ時代に
 生まれたところの私どもの幸福でありましょう。」（内は松原先生・以下同じ）
 こういうようなことで、先生を語っておられるんですね。

* この対話は、昭和五十八年四月八日、松原祐善先生の自坊である圓徳寺（福井県大野
 市日吉町八一）の曾我先生の「開神悦體」の横額がある一室で、藤 兼見師を対話者
 として行われた。

聞き手 藤 兼見氏（福井県大野市・最勝寺住職）
 まとめ 熊谷直美（福井市・善照寺住職）

目 次

『親鸞の仏教史観』のあとさき

第一講	1
第二講	28
第三講	39
第四講	61
第五講	104
後 記	139

第一講

自分の宿業しゆごうならびに仏祖のご冥祐めいゆうによりまして、今年、夢のうちに還暦の年を迎えました。みなさんはご多忙の中から、東西南北遠近よりお集まりくださりまして、私ごとき者の健在を——健在と申しましても碌々ろくろくたる健在をばお慶びくださいますことは、まことに身にあまる光榮、感謝のことはも知らぬ次第でございます。

一 講
ただいま金子さんよりまことに恐縮しますような、ねんごろな紹介をいただきましたが、そのおことばを拝聴いたしましたして慙愧ざんきに堪えぬ次第であります。今回は別段お話ししたいと思うこともありませんので、昨年ごろからちょっと自分の胸に——元より自分には特別に学問とか研究とかいうことはあまり縁のないことばでございます。

自分の今までの生活にはまったく用のないことばでございました。したがってここに「親鸞の仏教史観」というような題を掲げましたけれども、別に自分の研究の発表とか何とか、そういう意味ではまったくないのであります。ただ自分の折々に思い出しましたこと、また、その折々に断片的に感想を申し上げたこともあります。それをまた今回繰り返すようなことをさせていたいただきたい。まあこういうような私の願いでございます。

「親鸞の仏教史観」、これにつきまして今日一般にわが聖人の教徒たるものが、「親鸞」というようなことをいっても、みなさまは何とも思わずに、まず当たり前のことだというようにお聞きになっているではありません。けれども、自分で顧みますと、たしか大正七年の五月一日でありました。場所はまさしく大谷大学の大講堂、その当時真宗大谷大学といっていました。すなわち大谷大学の校友会——流れを汲んでその本源を尋ねる——尋源会という会の主催で大谷大学の講堂で宗祖親鸞の御誕生会を挙行しました。ちょうど私がある友人と共に、四月中に九州を旅行していたのを聞いて、

その帰り道を待ち受けて、そうして御誕生会の講演をしてくれ、こういうお話でありました。その講演の題はどういう題で話したか、はっきり思い出しませんが、壇に立った冒頭に、私は次のようなことを発表しました。それは「私は今日より、親鸞と言えば聖人と言わず、聖人と言えば親鸞と言わないであろう」と、こういうことを発表しました。つまり「親鸞聖人」、そう連続した言葉を使わないということでもあります。なお一言にして言えば、「親鸞聖人」という言葉は自分には今日以後用がないということを発表しました。

私はそれから以後、その誓いを破って時々「親鸞聖人」という言葉を使うこともあります。大体的方針としましては、ある時にはただ「聖人」と言い、ある時にはただ「親鸞」と言う。いかなる時に「聖人」と言い、いかなる時に「親鸞」と言うかは、これはみなさんは大概ご推察あつてしかるべしであります。つまりここには「親鸞の仏教史観」、こういうお席では「親鸞」と申すのであります。しからばどういう時に「聖人」と言うかということは、別に説明をまたないのであります。

世の中の多くの人は、自分の宗旨の祖師の名を呼ぶには必ず「聖人」とか「大師」と、敬称をつけている。「何々大師」、「何々聖人」、「何々禪師」、こう申します。しかるにそれらの人々が自分の宗旨以外の祖師方に対しては、言い合わせたように、ただ名を呼び捨てにしている。いや「日蓮が」、いや「法然が」、と言う。私はちょうどそれと正反対。私は真宗の一僧侶であります。だから真宗以外の祖師方に対しては「日蓮上人」と申し、「法然上人」と申し、「道元禪師」と申し上げるに對して、自分を正しく導き、常に自分の前に現在説法しておいでになるところの自分の祖師に對しては、ただ「親鸞」と申すのであります。というのが大体自分の方針であります。もってそのいかなる所以であるかということ、別に説明を要せぬのであります。

爾來滿十七年、今日といえどもあえてみなさんが一般にこれに賛同されるというわけではないであります。けれども、私のこの方針が實際正しい礼儀である、こういうことが自然に一般に承認せられたものとみえまして、大体今日ではそういう具合に、いつの間に行われてきているようであります。今日こういう題を私が掲げま

しても、あれは何宗の僧侶がそういうことを言うのだとお考えにならずに、あれは親鸞を本当に敬うて、本当に親鸞を自分の主・師・親として崇信しているところの人間が話をしているのだ、こういうことをみなさんがご承認くださるようになったということは、この一事だけでも私は、確かに正しいことはちゃんと実行されるものだということの一つの確証となる、こう思っております。

「親鸞の仏教史観」、こういう題目を掲げましたのは、親鸞は浄土真宗を立教開宗したところの祖師である、こういうのが一般の人が認めているところの常識である。

ところがこの世の中にはまたいろいろさまざまに考える人があって、いったい親鸞には浄土真宗を開闢する、そういう意思があったろうか、もしあったとすれば、そんなことをどこに彼は言っておられるか。ご師匠法然上人の仰せをこうむってただそれを深信するほかに別の子細はない、法然上人こそは浄土真宗を開闢されたお方である、こういう具合に親鸞は言っておられる、というように論ずる人がいる。それも一概にごもつともでないとは言いません。そういう言論を聞くと、ちょっといかにももつと

もらしく聞こえる。

しかし、いったい誰でもわかり切ったことのように、浄土真宗を開いたとか開かんとか、そんなことを争っているが、いったい浄土真宗を開くとはどういうことか、どうすることが浄土真宗を開くということか。それよりも、いったい浄土真宗というは何事であるか、何を浄土真宗というぞ、その具体的内容いかん。その内容が不明瞭であるならば、したがって、その浄土真宗を開くとか開かぬとかいうことは、われわれが門の戸を開いたり閉めたりする、そういうことのように明瞭ではないはずであります。門の戸というものがわかってからその門を開く閉じるということもある。けれども、浄土真宗というものはなんだかわからない。えたいの知れないものを無批判に、開いたの開かんの、いったい何を言うのか、大体そういうようなことが自分では考えられます。

私は近來つらつら『教行信証』を拜読しておりますうちに、この浄土真宗とは何ぞや、という問題に当面しました。しかるに、ふと感得したことは、浄土真宗というのは

これは親鸞の体験せられた新しい仏教史観であったのである。親鸞が、正しい仏教史についての見方、つまり仏教史の伝統、仏道展開の歴史の正しい相、正しい仏道の精神、それを明らかにした。だから、浄土真宗というのは、つまり親鸞の感受せられた仏教史観の名のりである。親鸞が法然上人から本願念仏の教えを受けられまして、むろんその時から、おぼろげながらもこの選択本願せんじやくほんがんの仏教史観の原理というべきものが、何と名づくべきか知らないけれども、一つの仏教史の根本精神というべきものがおぼろげにあっただろうが、親鸞は九歳の春の時に天台の慈鎮和尚の門を叩かれました時から、始終悩みに悩んでおられる自己の真実の生死出離の問題が、法然上人をおして、如來の本願念仏の教えというものによってそこに明らかになった。そうしてさらに法然上人をおして、その人格をおし流伝する仏道、すなわち法然上人の教えの伝統、その背景根源というものに静かに深く深くさかのぼっていかれました。二千年の昔にさかのぼっていかれまして、親鸞の今日まで二千年の仏教史によって、その二千年の仏教史の根幹、そこにはいろいろさまざまのおみおみのりの百花が爛漫として絢け

を競っておりす。いわゆる八万の法蔵をもって莊嚴せられておりますところの仏道の歴史であります。その仏教発展の歴史、二千年の仏教展開の歴史、その仏教史の根幹となるものは何であるか。それが興法利生の久遠の因縁によって、ついに親鸞をしてはつきりとその古来を一貫する歴史観、すなわち仏教史の根幹精要を内観する心眼を開かした。その史観こそすなわち浄土真宗というものであったのであります。

近頃は特に浄土教に関するいろいろの問題がいろいろの方面から提起され、また研究されておりますが、この浄土教に対する論難というものは、もちろん今日の思想界において、特に新たな意義をもって現れてきたのであります。けれどもしかし、浄土教に対する論難というものはずいぶん古いものであって、インドにおいても中国においても浄土教に対するもろもろの非難あるいは嘲笑、そういうものが昔から絶えず盛んに起こった。浄土教が盛んであれば盛んであるほど、その疑難が盛んであった。つまり、浄土教に対する疑難が盛んであったということは、浄土教の勢力が盛んであったということをも最も直接的に証明しているといふべきであります。

ここまでお話しつつ、いわゆる「信順を因とし疑謗を縁とする」というこの親鸞のお言葉を、ただいま金子さんがご引用になってお話くださいましたので思い出しましたが、この信順と疑謗というのはなぜか知らないけれども、そこに反対してしかもその二つが必然的に関係をもっているということ、およそ信順のないところに疑謗は起こらず、疑謗の声のないところに生命ある信順はない。もちろん疑謗する人には同時に信順はできない、現に信順した時に疑謗はすでに止む。それにもかかわらず真剣な信順者のあるところには必ず懸命の疑謗者があり、さかんなる疑謗者に対して疑蓋^{ぎがい}無雑^{むざう}の信順というものが成立し、またこの超然たる信順者に対して疑謗というものが、いよいよ盛んに興ってくる。言ってみれば、われらの真実浄土の歴史というものは、いわゆる信順と疑謗との常恒不断の戦いの歴史であった。真実浄土の歴史はただの信順の連続ではなしに、信順と疑謗とが不断に相争うところに、浄土莊嚴の聖業^{しょうごう}の無尽の展開がある。そういう具合に観られるのが親鸞の仏教史観、つまり親鸞は仏教史をそういう具合に観ておられるのでなからうか。これがすなわち浄土真宗の立教開宗で

なかるうか、こういう具合に私は思うのであります。

それで今申しますように、親鸞から見れば親鸞以前二千年、今日までは二千五百年ないし三千年と申すのでありますが、私から言えば二千五百年ないし三千年の仏教の歴史、親鸞から言えば二千余年の仏教の歴史、この仏教史を一貫するところの仏道の根幹というものは何であらうか。

明治以来六十余年間歩み来ましたところの現代の仏教研究というものによって観ると、まず教主釈尊の純一なる根本仏教から遺弟たちの小乗仏教というものになって——三藏さんざう結集けつじゆを契機として幾多の部派に分裂して個人的主観的小乗仏教というものになり、その弊の極まるどころ、ここに一種の復古運動、釈尊中心主義統一運動として、大乘仏教というものが興ってきた。第一に未来のこの世界の教主弥勒仏出現の要望によって大乘運動は端緒を得、それに次いで東方の阿闍あしやく如来の浄土往生の信仰が興り、最後に西方阿弥陀仏極楽浄土の信仰というものが現れ、ここに大乘仏教運動の志願は成就せられたのであると、こんな風にいかにももっともらしく——もっともらしくと

言えば失礼であるけれども、私には確信できないから、もっともらしくと自分の愚かなる感情を表明したままでありますが、そういう具合にもっともらしく、確実らしく、そういう具合にほとんど決定されているごとくに、一般にそういう説が行われている。私は一種の説明としてのそれをかれこれと申すではありません。そういう具合に説明するのも一つの仏教歴史の説明でありましょう。

けれどもそういう道程方法によって創造される仏教は一つの唯物史観の対象である。仏教唯物史観とでもいうべきものでありましょう。それもたしかに一種の仏教史観に相違ない。けれどもそれは、唯物論の立場に立ったところの仏教史観というものに過ぎないのではなかるうか。つまり仏道の精神を否定する唯物史観、そういうものでなかるうか。私ごとき浅学不徳の者がただひとりこの道理を説きましたが、今の世にはいたずらに嘲笑的たるに過ぎないであります。これ以上言うことをやめます。けれども、現今、仏教研究の大勢を観るに、だいたいの傾向をいうと、そういう結論に到着する。かくては、ついに一貫した仏教の真理の体というものはなにもないので

あります。その史観の上に一貫した仏道精神はなんにもなしに、いたずらに学究的仏教史というものが残る。そういう一つの仏教史観も一種の仏教史観にちがいない。

しかし、そういう仏教史観は宗教否定の唯物論という基礎に立って仏教滅亡を説明するところの仏教唯物史観、やはり一種の仏教史観だから、そういう意味において、やはり過去の仏教を説明する学問として価値のある説であるにちがいないと思うのであります。それ以上私はかれこれと申すのでない。やはりそういう一つの立場、無自覚とはいえ、唯物史観の立場に立っているのである。こう言えばもうそれ以上言う必要はないのであります。それは、昔からやはりそういう一種の仏教史というものがあつたのであります。歴史研究というものがだんだん明らかになって、そういうようから無自覚的に歩いていった方針が明らかになってきて、そうして新しく唯物史観というものが今日ではどれだけの程度に成立しているか、私はそういうことは知らないけれども、現今新しい仏教学徒が盛んに論じていることを聞いてみると、相当立派な唯物史観が成立しているのでなかろうかと思うのであります。そういう意

味において敬意を表してよいと思つてあります。

それはそれとしておきまして、親鸞の仏教史観においては、あえてかかる仏教史観に一概に反対するものではありません。それらをもやはり内に包んでいるのであります。この親鸞の仏教史観においては。——いったい今日の人の考えでは仏教の真理というものは釈尊以前にはまったくないので、釈尊が初めて忽然として発見されたのだ、したがって釈尊が仏教の根本的開祖であると。もちろんそれにちがいない。私といえどもそれに反対するわけでない。釈尊は仏教の開祖である。仏教はこの意義において釈迦教と呼んで差し支えないのである。この意義において仏陀といえれば直に釈尊のことであつて、したがって仏教といえれば釈迦教である。かくして仏教というのは仏陀が説いた教え、すなわち仏陀所説の教えということである。すなわち仏陀の証、その境界のごとく仏陀が説いた教えが仏教である。すなわち仏所証の法、仏所説の法、こういう具合に一般に考える。

一 講

けれども親鸞の言っておられる仏教というものは、単に仏陀が説いた教え、仏陀が

悟った教えというだけのことでない。親鸞の仏教はただちに仏陀に成る教えであり、仏陀を説く教えである。仏をして真に仏たらしめ、同時に衆生をして仏たらしめんとする教えである。仏が真仏たる覚証によってすべての人類が平等に仏に成るべき因道を開顯されたのであります。

今日の仏教学者の研究の方針は、仏教というものは仏陀が説いた教えだ。したがってかれらにとってはまだ仏陀が説いたか説かないか、そういうことだけが問題になっている。しかしながらわれわれの問題は、仏陀が説いたか説かぬか、こういう事項も一つの重要問題にちがいないけれども、それよりもっと重大な問題は、仏教というものは仏に成る教え、仏を説く教えなのだ。畢竟ひつぎやうするに親鸞の仏教は仏自証の教え、自説の教えである。あるいは仏能証能説の教えである。これら能所の位地をはっきりしておく必要があります。しかるに、このごろの仏教研究というものは、仏に成る、仏を説くということのをのけものにして、ただ仏陀がどういうことを説いたか、したがって仏陀が説いた教えから推論してその所証の道を想定するにすぎない。

あるいは言うであります。今日われわれが専心専意仏陀が説いたか説かぬかという仏説問題を研究することは、それは仏陀の教説は如説修行すれば必ず仏のごとく仏に成れることを説きたまえることを信ずるからで、いまさらに汝のごとく言う必要がないから言わないのだ、こういうとあるいは叱られるかも知れません。そういうお叱りは私はあえて甘んじて受けても差し支えはない。差し支えはないが、どうも今日でもそういうことを承知の上でそう言っているお方もおられるであろうかと私は思っている。けれども、どうも雑誌とか著述とかいうものに現れている——それも私はあまりきこん機根がないものですからたいがいのは見ません——けれども、仏陀が説いたか説かぬかということのみを決めて、仏に成る成らぬという実践の事業はあまり問題にしない。それに傑出したる学人はもとよりそこまで考えているかも知れんけれども、一般学徒はそういうことはほとんど問題にしないように考えられるのであります。

かくのごとくして、この仏教の研究というものがいったどこへ向かって歩いているのであるか、こういうことをよくみなさんに私はお聞きする。まあ自分は年寄りで